

歴史総合の教科書のソ連ポスター

解説 池田 嘉郎



図1 「ソヴィエト＝ロシアのポスター」

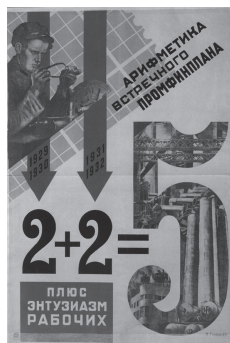


図2 「五カ年計画のポスター」

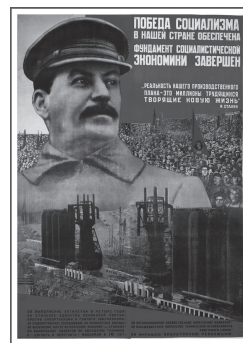


図3 「ソ連の社会主義の勝利は保障されている」

(カラー図版は巻末図版参照)

1917年の十月革命でロシアに成立したソヴィエト政権は、民衆向けの政治宣伝に力を注いだ。インパクトのある図像やキャッチコピーでいरोどられたポスターが、そのための主要な手段となった。大量に印刷されたポスターは国内各地に頒布され、新聞社や工場や街頭などで掲示されることで、住民に政権のメッセージを伝えた。その製作にたずさわったのは、画家ドミートリー＝モールや写真家アレクサンドル＝ロトチェンコをはじめ、第一線で活躍する芸術家ばかりであった。芸術家たちにとって、ポスター製作はどのような点でやりがいがある仕事だったのだろうか。第1に、感覚的なインパクトが重視されるポスターでは、大胆な構図や印象的な言語表現など、革新的な表現を試みることができた。第2に、大量に複製されて、労働者や兵士、農民といった民衆層に向けて発信されるポスターは、芸術の民主化を体现しており、大衆の時代にふさわしい新しいメディアなのであった。

では、ソヴィエト政権はなぜ、政治宣伝の手段としてポスターを重視したのであろうか。その背景には、住民の識字率の低さがあった。1897年に

おこなわれたロシア帝国(フィンランドを除く)の国勢調査では、住民全体の識字率は21.1%にとどまった。革命後、ソ連邦ができたあとの1926年の国勢調査でも、9歳から49歳までの住民の識字率は56.6%であった。多くの人がいまだ十分な識字能力をもっていない状況にあって、ポスターは図像によってメッセージをわかりやすく伝えることのできるメディアとして、政権に重視されたのである。

『歴史総合 近代から現代へ』(歴総707)では、ソヴィエト＝ロシアのポスターが2点紹介されている。1つ目の「世界帝国主義に死を」(p.110¹³)「ソヴィエト＝ロシアのポスター」(図1))は1919年の作品で、代表的なポスター画家ドミートリー＝モールの手になる。このポスターはどのような時代につくられたのであろうか。19年当時、ロシアでは熾烈な内戦が繰り広げられていた。十月革命で生まれたソヴィエト政権は1918年春から、旧軍将校・自由主義者・非共産党系の社会主義者(エスエルやメンシェヴィキなどで、共産党と違って急激な社会主義政策の導入や、苛烈な階級闘争路線の追求に反対した)・民族主義者・農民ゲリラ

など、国内の様々な反対勢力を相手にして内戦を戦うことになった。加えてイギリス・フランス・アメリカ合衆国・日本といった連合国側の列強諸国も、第一次世界大戦の戦線にロシアを引き戻すため(ソヴィエト政権は18年3月に中央同盟諸国とブレスト＝リトフスク条約を締結して、戦線を離脱した)、あるいは日本の場合はシベリアにおいて勢力圏を拡大するために、ロシアに軍事干渉を展開した。干渉軍はロシア国内の反ソヴィエト勢力としばしば提携したから、ソヴィエト政権からみれば両者は一体となって帝国主義の脅威を体现していた。ポスターに記された「世界帝国主義に死を」という言葉にも、抽象的なスローガンであることをこえて、ロシアで戦われている戦闘に裏づけられたリアリティをもっていた。

モールの描く世界帝国主義は、巨大な竜(虫のような顔だが)の姿で、労働者の拠点である工場を支配している。竜を攻撃している人たちは労働者・兵士・水兵であり、基本的にはロシアの人々のようであるが、万国の民衆の姿が重ね合わせられているとみることもできる。実際、このポスターがつくられた1919年には、ウラジーミル＝レーニンの主導で共産主義インターナショナル(コミンテルン、第3インターナショナル)が結成され、各国に社会主義運動を広めるための拠点となった。コミンテルンの結成をふまえたとき、このポスターに込められたソヴィエト政権のメッセージはどのようなものとして考えることができるだろうか。それは、各国の資本家・帝国主義勢力を一方として、ソヴィエト＝ロシアおよび各国の民衆からなる社会主義勢力を他方とする、世界規模での闘争が始まっている、というメッセージであったのではないだろうか。

共産党は一党独裁体制を築き、厳格な統制経済をしくことで、内戦と干渉戦争にたえ、勝利することができた。ロシアでの戦闘は1920年11月までにおおむね終息した。だが、社会主義体制の実現

を追求する共産党は、経済統制をゆるめようとはしなかった。農民や労働者はこれに反発して、村ぐるみの蜂起や工場でのストライキなどの抗議行動を活発化させた。この事態を打開するためにレーニンは、21年春に経済統制を終わらせて、市場経済を導入した(「新経済政策」、略称ネップ)。これによって内戦期は終わり、ネップ期が始まる。ネップ期に経済は回復したが、亡命先から帰ってきた企業家、息を吹き返した商人、それに投機家などが裕福になる一方で、労働者はときに解雇・失業の憂き目にあった。みなが窮乏していた内戦期とは違って、貧富の差が激しくなってきたのである。共産党員や労働者のあいだではネップに対する不満がつのった。そうした不満を背景として、ヨシフ＝スターリンは28年頃から計画経済にもとづく工業化、それに農業集団化に踏みきった。こうしてネップ期は終わり、本格的な社会主義体制がつくられていくことになった(これ以降、スターリンが死ぬ53年までは、「スターリン時代」ということになる)。

このスターリン時代の初期につくられたのが、2つ目のポスター「生産財務呼応計画の算術」(p.134⑦「五カ年計画のポスター」〈図2〉)である。1931年の作品で、画家ヤーコヴ＝グミネルの手になる。1928年に始まった第1次五カ年計画(28～32年)のさなかにつくられたポスターで、工業化が急激に進む当時の熱狂が示されている。工業的モチーフや幾何学的デザインを多用する、構成主義と呼ばれる20年代～30年代の前衛的な様式にもとづいている。

ポスターのタイトルにある「生産財務計画」とは、企業ごとの一定期間における生産・財務面の計画を指す。では「呼応」とは何かといえ、中央の計画策定機関から降りてきた計画目標に対して、個々の工場の側でより高い目標を設定し直して、実行することを意味する。呼応計画は1930年6月にレニングラード(現在のサンクト＝ペテルブル

ク)の一企業で始まったとされる。当初は生産現場における末端共産党組織や労働者の自発性にもとづいていたと考えられるが、徐々に生産拡大のためのキャンペーンと化した。

ポスターの内容を細かくみてみると、1929年度～30年度の数値が2であるのは、おそらく生産実績を指す。この実績をふまえて、中央の計画策定機関が、31年度～32年度の数値目標をやはり2と設定している。これに対して、現場の側がより高い数値を出せるはずだというのが、呼応計画の考え方である。2+2の下には「プラス労働者の熱情」とある。労働者の熱情によって、より高い目標数値をあらたに設定できるはずだ、そうすれば2+2は通常の算術の答えである4ではなく、5になるという趣旨である。

2+2=5という算術は、第1次五カ年計画期の有名なスローガンである「五カ年計画を四カ年で」を下じきにしているのであろう。労働者の熱情によって、計画の達成期間を短縮できるというのがこのスローガンの意味である。

これらの算術やスローガンからいえるのはどのようなことであろうか。まず、第1次五カ年計画が、厳密な計算にもとづくものであったというよりも、労働者の熱情を引き出すための動員プロジェクトの性格をもっていたということである。中央機関が策定した数値を現場が勝手にかえてしまうのであれば、それは本来の意味での「計画経済」とは呼べないであろう(のちの時期には、より安定的な経済計画が実施されるようになった)。つぎに、第1次五カ年計画期にソヴィエト政権は、工業化に向けた労働者の熱意に大いに期待していたということである。その期待は裏切られることはなかった。ネップに嫌気が差していた労働者や失業者は、本格的な社会主義建設が始まるというスターリンの呼びかけを歓迎した。彼らは困難な労働条件のなかで計画の超過達成に取り組み、ソ連の工業化を進める原動力となったのである。

別の教科書である『現代の歴史総合 みる・読みとく・考える』(歴総708)には、より多くのソ連ポスターが掲載されている。紙幅の都合上、ここでは「わが国における社会主義の勝利は保障された。社会主義経済の基礎は完成された。」という標語が書かれた、1932年のポスター(p.77^[5]「ソ連の社会主義の勝利は保障されている」〈図3〉)についてだけ触れたい。これは初期ソ連を代表するグラフィックデザイナー、グスタフ＝クルツィスの作品で、構成主義の写真コラージュである。農業国ロシアでは、社会主義を1国だけで達成するのは困難だというのが、1920年代の共産党内における有力な見解であった。だが、スターリンは工業化を強行することによって、この見解に反駁した。この標語はスターリンによる達成を誇示しているのである。

写真のコラージュは、建設が進む工場を手前にして、スターリンの大きな胸像を配置して、その背後には多数の労働者が群れをなしている。このポスターにおけるスターリンと群衆の関係は、どのように読み解くことができるだろうか。一方では、偉大な指導者と、名もなき小さな人々とのあいだには、圧倒的な距離があるようだ。だが、他方では、こうした名もなき人々こそが、スターリンを支えているとみることもできる。事実、スターリンのつぎのような言葉がポスターには引用されている。「われらの産業計画のもつ現実性、それは新しい生活を創造している数百万の勤労者のことである」(経済活動家会議での演説、1931年6月)。この言葉は、自分たちが主人公となるような新しい社会をみずからつくり出すことを求める、多くの労働者の期待と希望によく合致するものであった。ソ連のポスターは、極端な変化があいついだ20世紀ロシアの歴史を目にみえるかたちで表現し、当時の熱気的一端を私たちに伝えてくれるのである。

(いけだ・よしろう／東京大学大学院人文社会系研究科准教授)